
代替転生物語

兎人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

代替転生物語

【Nコード】

N5877T

【作者名】

兎人

【あらすじ】

「転生したい！」というヲタクで腐女子な「柏木鈴音^{かしわぎりんね}」を友達に持つ、名前が厨二っぽい少年「崇月夜埋^{あかめつやまい}」。
ある日、突然リンネは言った。

「私、転生するわ！」と。

そして「私が研究に研究を重ねた結果、車に轢かれそうになる生命を助け、身代わりになると神様がチートで転生させてくれるらしいの！」と声高々に叫びながら、車道にヤマイを突き飛ばした。

啞然としながら、体勢を整えるヤマイだったが、そこに迫るトラック。

キキィー、という音とともに、バシッと生肉を床に落としたかのような音が聞こえ、視界が白く染まっていく。

その後、ヤマイが目を覚ますと、目の前には男と女の姿が。

そして何故か「喋った。ママって言ったわ、この子！！」と興奮する女性と、逆に失意のどん底のように落ち込む男性。

どうやら転生したらしい、俺。

………とりあえずぶっ殺す、あいつ。

TS要素やボーイズラブ発言あり注意！

第一話 優しくしてねは魔法の言葉（前書き）

初投稿。心の臓が爆々。

書いててどうやら自分にはギャグは向いていないらしいと再確認。
とりあえず自己満足のための駄文。

ほんのりとボーイッシュなエッセンスなるものが効いておりますので注
意！

内容は（作者に）ご都合きみです注意！

第一話 優しくしてねは魔法の言葉

殺そう、帰れたら絶対殺そう

そう、俺は決意を固めていた。

え？何を殺すかって？

んなもん決まってるじゃあねエか、この状況を作りやがったあのクソツタレだよ、バーロー。

俺の目の前には、日本でも終ぞ見かけたことが無いくらいに綺麗な漆黒をした髪とこれまた見たこともない紫色の瞳をした女性と、金屬のような鈍さを感じる赤の髪と同じ色の瞳を持つ男性がいた。

正直、人間としてこんな色があつていいのかあのクソツタレが好きだなアニメとかそんなんでしか居ちゃだめなんじゃねエかコレ、と思う。

ものの、そんな風に思うのは、何となく罪悪感を感じるくらいコイツらは俺を見て喜んでいる。

「ママって呼んだわ、この子！やった、私の勝ちよ！！！」

「な、なん・・・だと・・・。アレだけ毎日まるで洗脳するかのよう
にパパと一時間言い聞かせたのに・・・」

「やっぱりそんなものより母の愛なのよねえ」

「べ、別に落ち込んでなんかないぞ。俺はママより先にヤマイの初
チューを、も、もらっただんだからな」

・・・非常にコメントしがたい。

なんか、なるほどこれがカオスという奴なのだろうか。いや、違うか。

まあそこらへんはあのクソツタレほど詳しくない俺であるが、この状況には覚えがある。

ああそうさ、アイツがいつつも隣に居て俺が今遭遇している奇怪現象について詳しく話していたからな！アレだけ言われれば勝手に脳が覚えるわッ！！！！

目の前にいる男性の洗脳うんぬんも本当であれば大概だが、ヤツのソツチ系統の話もある種の洗脳術のようだったのかもしれない。恐ろしい。

とにかく、状況を整理しなくてはいけない。よし、まず一から思い出していこうじゃねエか。

「転生したああああい」

ため息を洩らす如く、背伸びをして眠気を振り払うように、見た目だけは良い女が言った。

その姿は間抜けなものだったが、それでも美少女度は失われない。
・こいつに美をつけるなんて酷く癪に障るが。

「あ、ヤマイクーん！！！！」
激しく無視したい。激しく。

しかし無視するとこいつは俺のないことないことを大声で叫ぶので一応、反応することにした。

「ん」

「あーん、冷たいじゃん。どったの、もしかして彼氏に振られた？」

ダダダダ、と学校へ向かう道を逆走する疫病神は少しも息を切らすこともせず俺のところまで来て、少し屈みながら下から俺を見上げる。

アレだ、アニメのヒロインとかがしそうな、大げさな上目遣い。下から覗き込むな、鳥肌が立つだろが！

その動作がいやに様になってるのが異常にムカつくのは俺だけではない、と信じたい、が。・・・信じ。たい、が。

素早く視線をはしらせると、顔を赤くした男子生徒がひーふーみー・数えるのやーめた。どうやらスカートの中が見えそうでヤキモキしているらしい。

こんなヤツのパンツなんか見て何になるんだか、これで欲情できるヤツの気が知れん。

つと、コイツの言葉を否定するのを忘れていた。

「俺にそんな趣味はない。そして俺はこの世に生れ落ち呼吸をし出したそのときからお前に温かく接した覚えはない」

すたすたすた。ヤツの隣を通り抜けようとするが、

「お前だなんて。私のことはリンネちゃんって呼んで？」

さっさっさっ。

スキップするように軽やかに目の前に現れるクソツタレ。

その拍子に前の方で振り返っていた男子生徒が尋常じゃなくらいに顔を赤くした。

見えたらしい、その年でお前はどんだけ純情なんだ。エロ本見たことないのか？

思わず心配になったものの、見たことも無い男子生徒だったのでどうでもいいかと思放棄。まあたとえ知り合いだったとしてもどうでもいいが。

まあたぶん、本とかパソコンとかテレビの向こうの激エロよりも、現実の、目の前のちよいエロということだろう。

いやむしろ俺はコレのどこにエロさがあるのかと問いたいが。

「何だ何か用か？」
「何よ何か用よ文句ある？」
「何だ何の用だ文句あるどっか行け」
「何よなん………負けた」

どうやら後に続く言葉が思い浮かばなかったらしい。俺の勝ちだ。で、何の勝負してんだ俺。コイツのペースに乗せられてはいけない。平常心だ平常心。すーはーすーはー。よし、こういう手合いは無視するに限ると相場が決まっているではないか。そうだ、無視だ。そうすれば奴の方から離れていくはずだと、歩き出す俺に。

当然の如く、まるでカルガモの親子のようについてくるクソ以下略。あ、略したのに長くなった。お前は背後霊かッ、と突っ込みたくなるのを我慢しながら無視して歩いていると、何故かこちらの様子を背後から窺っていたらしい彼奴が俺の隣に並んだ。にへら顔である。

「んっふっふー」
ついでに声付き。激しくいらん。無視だ無視。

そう心の中で呟きながら歩いていると、
「ねえダーリン、あたし今度ナースさんのコスプレでしたいなあ。この前は制服でしたけど後始末が大変だったし、いいでしょ？」
俺の腕に絡み付いてくる奴の腕。熱っぽい声が聞こえたのか、若干前かがみになりつつ鼻をしきりに気にしている男子生徒。

ビキビキッ、怒りマーク。

言葉にせずとも分かるだろ。そんな感じ。

落ち着け俺。平常心平常心。

ここで怒ってしまえば奴の思う壺ではないか。我慢だ我慢。ザ・究極我慢キング決定戦みたいなノリで。

「あたしに突き刺して、センセイの猛り狂ったお注射」

言わせねーよ。あ、すみませんもう古いですかこれ。

てか、アリですか？アリなんですかここ。下ネタありですか？

というよりむしろお前のちよつと前に歩いてるだろ、猛り狂っちゃった馬鹿。可哀想に 涙目になっちゃって、いろんなものが滴ってますよ。たぶん学校着いたら即行でトイレに向かうんでしょうね。

まあそんなことはともかく、ソツチ系に走るんだったらそいつでも相手にしてればどうでしょう。

てか猛り狂ってますけど俺も、いやね精神的にね。爆発しちゃいそうですよむしろぶちまけて良いですか？え、俺も下ネタ？知るかよ俺の言ってるのはストレスについてだ！

いや、まだできるだろ俺。俺はやればできる。無視だ。ここさえ耐えれば俺はこの地獄オナナから解放されるのだから。

「ダーリンいつも激しいんだもん。今度は優しくしてね」

ブチッ

はい分かりますよね。うん、これ無理っしょ（笑）

これ凌ぐのかの有名な慈悲深きイエス様でも無理だと思えますよ俺。これ言われたら左右の頬打つだろ。連続ビンタだろ。むしろぶち殺せとお告げなさいますよイエス様。

そもそも、である。

『優しくしてね』

これは神聖なる言葉なのである。

初めてのことをするときには、誰でもナーバスになってしまいうもの。お互いに緊張しあっすぎてこちないときに、彼女がそつとか細かい声で囁くのだ。

『優しく、してね』と。

そのとき男は、ブチツと理性の糸が切れて野獣と化し、女はそれを優しく受け止める聖母となる。

そう、これは男と女が本能に覚醒するための魔法の言葉。

……いや、ね。

確かにね。ブチツときちやいましたよ。うん、理性の糸もぷつつんしましたね、うん。

でもね、俺がこれを経験するとき。それは俺が生まれて初めて女性の柔らかさや肌の匂いを知るときなのであつて。

決して、コヤツの頭の硬さや血の匂いを知るときではないはずなのである。

「死・に・さ・ら・せ」

ゴチン。おー、いい音。握り締めた拳が痛いぜコノヤロー!!!!!!!!!!

「もー酷い。あそこまですることないでしょー」

「俺の純潔を汚した貴様が悪い。大人しく死んどけや」

「やーん。おーカーさーれーるー」

「むしろ俺が貴様のクソツタレな脳みそに侵されるわッ!」

略して、くそみそ。や、ウソウソウソ。そんな引かないで。

「白石くん、助けてええええ」

すぐ近くにいた例の発情男に抱きつくクソツタレ。

「えっ、えええ」

当然の如く顔を赤くしている。見れば見るほど初心ですね、童貞くん。ああいや俺もですけどね。仲間仲間。

愛い奴じゃ、とは思わん。男は守備範囲にない！！

ん？ネットユーザでもない俺が何でくそみそを知ってるかって？あ、いやっ、それはだな……。違いますよ、違いますからね。言っときますけど女の子大好きですから俺。

まあほら、アレだよアレ。クソツタレが言うところの黒歴史という奴である。まる

いやもちろんアッーな体験をしたわけじゃねえよ。断じて違う。そんなノンケが中学時代に部活の先輩に無理やり「やめてくださいっスよせんばあい（涙目）」なことをされてソツチに目覚めちゃうような話そこら辺に転がってたら大変ですからっつ。

……。お、おけつち俺。ん、おケツ血？ちげっ、おちつけ俺。深呼吸
吸平常心。

俺が焦るたびになんか墓穴掘ってる勘違いされたらたまらねえからな……。いやですから掘ったり掘られたりしてねえですってエー、先輩（泣）

……。ハッ、何か今取り憑いてた。

これがアイツのいう憑依モノという奴なのか、恐るべし。

ちなみにここまでの思考で二秒、だったりはない。そんな特殊スキル持っていないですからね。

そのため放っておかれた二人はどこか困り果てた様子である。

「えつと、突っ込まないの？」

「・・・俺、白石違くて、田辺です」

さりげなく訂正する白石。じゃなくて田辺。どうやらホ（濁音）ッキは治まったようである。良かったね。

「ん、ああ。えと、んとー、ごめん。どこに突っ込めばいいかよく分からんくなった」

「・・・白石くん、助けてええええええ」

「ええつ」

「んだと！」

まさかの仕切りなおし。

よもや現実にこの伝説の奥義を使う人間がおったとは思わなんだ。とりあえず、ヤツにここまでさせたのだ。俺が乗ってやらねば。

「あー・・・しっ、白石くん誰やつ!!！」

「・・・」

「・・・」

じとつとした目で俺を見てくる二人。

「・・・」

ずかしいぞ俺。あれ、何だコレ。

「んがあああああああ」

思わず体を掻き毟ってしまう程の羞恥が俺を襲う。何だこれ、さっきまで当然のようにできていたであろうことが突然できなくなる、だど・・・!!！

どうしたんだ俺。できるはずじゃなかったのか俺。

これが仕切りなおしの効果および副作用なのか。なんて、諸刃の剣とてもじゃないが俺みたいなのは使いこなせない。仕切りなおし、恐ろしい技。

「まいいや。おふざけはここまでにして本題に入るべく、じゃあね
白金くん」

「ああ、いや白石じゃ・・・あ、白金じゃなくて、田辺です」

呟くし、田辺。これを機に名前を覚えてもらってお近づきになる

うつでも思っただらうが、甘い。甘いぞしらい・・・田辺。

コイツとお近づきになんてなつてもみる、あーんなことやこーんなことの妄想に使われて背筋に寒気を感じながら日常を過ごすことになるんだぞ。

それどころか、よく奴と話している、地味めな女子がニヤニヤしながらこつちを窺い話すんだぞ。耳を澄ませば「ウケ」だの「ニヨウドウゼメ」だの「ゼンリツセン」だの意味不明だ。

俺は声を大にして言いたいね。

「ウケ」って何だ？女子とかが使うマジウケるーって意味かコラ。

「ニヨウドウゼメ」？それはアレか、兵糧攻めとかそーゆーのか？

「ゼンリツセン」？俺はお前らに戦慄せんとしてるんすけど何か？そんな意味のわからない、しかし明らかに教育に悪いと思われる単語が聞こえてくるんだぞ。

それだけじゃ飽き足らず、クラスメイトや先生と俺が掛け算されたときはさすがの俺も耐えることができずにその場を離脱したが・・・

げに恐ろしきは腐的な女子である。

怖エ。

ともかく。

そもそも声を掛けられたことにすら気づかずささと歩いてってるヤツに対して近づくのは無理っぽいと思う。無念、しらっじゃなくて田辺。・・・もう白石に改名すれば、白石。

よし。

まあそんなことはどうでもよく、しかしヤツを追い払ってくれたことには感謝しよう白石。お前のことは昼飯時まで忘れないよ。

達者でな、と俺はこっそりそのまま曲がって普段通る道の一個隣を行こうとしたのだが。

「すう、あがめつやまい崇月夜埋くんは実は　　！！」

「スマンツ。ご一緒させてください」

突如として叫びだしたヤツに被せるようにして大声を出す。
経験からして知っている。

後に続くのはおそらく、『ゲイで年上の彼氏と昨日はお外で？バキ
ユーン？なことをしたそうです』か『ゲイでクラスメイトみんなに
？まわるーまーわるーよ世界ーはまわるー？なことをされるのが夢
だそうです』とか戯言をほざきやがるのだ。ケっ、クソツタレが！
死ね、一遍どころか二度死ね！！

俺の学校生活、どころかこの町での営みを守るためには、これしか
ないのだ。

これは苦行、我慢せいで俺。さすればきつと、いつかはおそらく救わ
れるに違いない・・・と、俺は信じて、いたい。まだ、諦め
るには早すぎるんだ！！ぐすんっ。

あーあ、早く死なないかなあコイツ（遠い目）

第一話 優しくしてねは魔法の言葉（後書き）

赤ちゃんていつごろ話すのだろうか？

赤ちゃんて目が見えるようになるのはいつごろだろうか？

・・・そこらへんは（作者に対する）ご都合主義。

そして変なところで切ってすみません。長く書こうとすると、自分の首を絞めかねないので。

次回ようやく（と）っていいものか？（転生する経緯が明かされる、予定。

・・・書くたびにキャラを変えてしまいそつで怖いなあ（と）ぼとぼ

第二話 厨二は程ほどに！（前書き）

看板に偽りあり！

書いてみると、何だかちょっと予想とは裏腹な文になりました。

・・・どうしてこう計画性がないのだ、俺。

第二話 厨二は程ほどに！

ちゅーにびよー。

この言葉が俺は生まれつき、いや母親の胎内にいた頃から大嫌いである。決して大げさでも誇大発言でもない。

それは何故か？ご存知のはず、俺の名前は崇月夜埋。

何て読むか理解わかるかな？

あがめづやまいだよー。ヤマイ・アガメツですよ？

何ですかソレ。

月を崇めないで、夜に埋まってるって。

アレか、俺は闇の眷属で実は吸血鬼という太陽光で「うぎゃあああ」とかなる特殊設定をお持ちの痛すぎる人間なんですか！？

いや、確かにそう言うのは嫌いではない。むしろ俺は漫画や小説では悪役を必死に応援するような男だ。

だってカツコイイですもん。

大体にして、主人公とか嫌いだ。ぺっ、胸糞悪い唾を吐きたくなるね。

ピンチに陥ったら本領発揮とか、貴様は馬鹿か！何土壇場で進化してやがるんだよ主人公は勝つ正義は勝つ的展開なんかクソ喰らえなんだよバーカアーホドジマヌケっ。

・・・スマン、興奮しすぎた。

とにかく、まあこれは才能を持たない一般人の妬みや僻みだと解釈してもらっても構わないが、そういうことなのである。

ヒーローとか嫌い。もし何らかの理由でヒーローショーに出ることになったら俺は迷わず雑魚Aを選ぶ。そしてキーキー叫びながら同じく雑魚共と戦隊の一人を困むのだが、回転蹴りやら何やらで一撃で大地に沈むのである。

その回のボスである悪役が現れた際、こちらに注意を向けていないヒーローの足を掴んでその隙にボスが一撃でも入れてくれたらそれだけで大満足である。

ここまで言えば、俺がどれだけ主人公がきら、じゃなくて悪役が好きかが分かってくれただろう。

・・・おおと、いつの間にか話が脱線していた。
俺の好き嫌いとはかくとして、である。

とにかく俺はちゅーにびょーなるモノを患っている人間があまり好きではない。え？俺はどうなのかって？そんなもの決まっている。
俺は断じてちゅーにびょーなるモノに感染してはいない。はず、だ。

違うつ。罹ってなんかない！

ただ全くの関わりを持っていない、といえは嘘になるだろう。何故なら俺の隣で当然のように俺に話しかけてくるクソツタレがそのちゅーにびょーの権化だからだ。

「ろいろ考えてただけだね、こんなはどう？その名もエントラン無人スエグジット回廊！！」

え、えんと・・・何？

とまあ、こんな調子で訳の分からんことを言っている輩である。

こいつの言語はきつと宇宙人並に難解であり、きつとこの解読を成し遂げたものは近い未来宇宙に人間が移動することになったら宇宙原住民との通訳として活躍するのだろうかと推測できる。

「カツコよくない？キャラクターとしては、狂気系として。主人公にこう、頭おかしい感じで迫るの？んー殺人系キャラでいいか。ヤンデレとちゅーかなんとちゅーか」

早く学校に到着しないだろうか、と無意識のうちに（あくまで無意識だ）歩幅が大きく、速度は上昇するのだが、奴は気づいた様子も見えない。

ふっ、さすがに超能力者じみた勘を持つこの女でも、無意識には敵うまい。

俺のしょーり！そう思ったのだが・・・。

「なん、だと・・・」

「ん、どつたの？」

せっかく気づかれずに足早になれたにもかかわらず、ああ神は何て残酷なのだろうか。目の前には信号という名の神の試練が立ちはだかっていた。

チツ、神死ね。

俺を邪魔する奴はいらん、即座に死ね。

「ああいや、信号がちょうど赤になったので思わず」

「あーそゆこと。ヤマイクン運悪いよね。ヤマイクンといるとも赤で止まる気がするし」

なっ、それは違う。断じて違う！

そもそも俺一人のときはこんなに運がよくていいのかと思うほどするすると町を歩けるのだ。俺が赤で止まるのはコイツといるときだけ。

決してコイツとできるだけ長く居たいからわざと赤信号につかまるうとしていたりとかいうわけではない！断じて！そこっ、シンデレ言うなッ！！

違うからな、墓穴を掘っているわけでもないからな。勘違いするなよ！

そんなことを思っているのが顔に出ていたのか、

「私も一人のときは赤につかまったりしないから。ヤマイクンといるときだけよ」

それは・・・アレか。

そういうことなのか？なーんて反応しませんよ。

そんな反応したらどこの少女マンガだ！てすぐさま戻るボタンを連打する自信が俺にはあるね。

「へー」

大して興味もないので流す。

それにしても、いやに長い赤信号につかまったものだ。全く、本当に疫病神かコイツは。

「あ、そういえば信号で思い出したんだけどさ」

「へー」

そろそろ時間もヤバくなってきてないだろうか。信号が青になったら走ることにするか。長距離は苦手だが、ここから学校まではそう遠くもないことだし、コイツもさすがに俺の走りに追いつけたりはしないだろう。

「私が研究した結果、ていってもそこまで大したものでもないんだけどね」

「ほー」

いや、もしかするとコイツならできるやもしれん。なんてつつあってコイツはあらゆる意味で規格外だ。体育のときはどうだったっけ。

短距離走、早かったっけコイツ？

「ほら、ネットの小説とか読んでると、私と似たような願望の持ち主がいるじゃん」

「んー」

どうだったかな、コイツ。確かマラソンは異様な程得意だったような気がする。体育会でも女子の超長距離に出てたからな！。体力は異常なはずだ。

「で、そういうのでは大抵車とかトラックに轢かれそうな子供とか猫とかを庇ったらね」

「おー」

そもそも長距離が得意だとおのずと短距離も走れるようになるんだらうか？いや、しかし長距離選手と短距離選手じゃあ鍛え方とか違うだろっしな。

「神様がチートな能力をくれて、異世界に運んでくれるのよ」

「はー」

まあ大丈夫だろうきつと。俺は男子の中でも足が速い方だし、この女は短いスカートというハンデも負っている。まさか、いやまさかスカートを翻しながらパンツ丸出しで走ったりはしな、い、だろ。

「・・・ん、アレ？いいチャンスじゃない私」

「あー」

いやいや、まさか、な。この女にも少しくらいは恥じらいというものがあるだろう。別に俺はパンツ丸出しで追ってきてもいいのだが、だがそうになると、そこまでして追いかける俺に関しても何か噂がたつたりしないだろうな？

「え、ヤマイくんもそう思う。そう、そうよね。こんなチャンスを逃すことはできないわよね」

「おー」

どうなのだろう。俺はそういう噂とかには疎い方だから、あんまり噂の広がり方とかどんなのが広がるとかというのは知らんしな。ここは慎重に行くべきなのか。

「よし。」

柏木鈴音、かしわぎすずねここに転生を宣言します！

「ほー」

となると、ここはもういつそのまま早歩きで行った方が安全なのだろうか

「てなわけで猫役よろしく！」

仕方がない。早歩きで行くとす とんつ。

「へっ？」

随分と考え事をしていたらしい。状況がいまいち把握できない。どうなってるんだ、と崩れた体勢を直しながら視線を走らせると、手をぱーの形にしている女がいた。

コイツが俺を押しやがったのか、と内心キレる。が、そんな余裕はなくなつた。

押されたということは、俺は前に出ているのである。そして俺は赤

信号ということでは止まっていた。

つまり、前は車道。

「ぬあつ!?!」

見れば、大型のトラックがこちらに向かってまっしぐらではないか！これは冗談ではない。

まだ間に合うだろうと咄嗟に戻ろうとして、俺は驚くものを見た。
「バカヤロツ」

何故だが知らんが手を伸ばしながらこちらに来ようとしているクソツタレを元の場所に突き飛ばす。一体何がしてエんだコイツ!!!
だが、その動作のおかげで俺自身の移動が遅れた様子。
スローモーションの如く、すぐ隣に大きなバケモノが俺を喰らおうとしているのを感じ取る。

チツ、こんな終わり方ってアリかよ!!!!!!

目をこれでもかというくらい開いた女が、無様に転んだままこちらを呆然と見つめていた。

クソツタレ、コイツのためにまさか俺が死ぬことになるとはな。

あーあ、にしてもこんな終わり方。

自分でいうのもなんだけど、ヒーローっぽくてあんまり好きじゃねエな。

次の瞬間に備えて、俺はそっと目を閉じた。

瞼の裏には、クソツタレの姿があった。

思い返してみても、改めて思う。

やっぱり殺す。いやむしろ殺すだけじゃ足りん。一度殺してから俺に一生貢がせ、そして殺す。

そもそもアイツがあのお土壇場でこっちに來なけりや、いやそもそもアイツが俺を押さなきゃ俺は死ぬことなんて無かっただろうに。クソツタレ、奴は最期までクソツタレの疫病神でありやがった。・・・まあいいか。今どんだけ考えても役には立たないだろうし、もし奴のところへ帰れたらそのとき考えればいいだろう、復讐の仕方はない！！！！

にしても、アイツが俺を殺したことになるんだろうか。この場合。・・・それは、何かアレだな。なんというか、ヤだな。俺直々に手を下すべきことであるのに勝手に罰を受けられるのは癪というか。

別に奴が可哀想というわけではない。むしろざまあみろではある。だが、俺はこうして現に生きているわけだし、それなのに奴が殺人とかで刑務所行きになるのは、な。

きつと、俺を殺す気はなかったのだろうし。

アイツはクソツタレで疫病神だが、悪い奴じゃあねエし。

事故で処理されてればいいが。いや、アイツ変なところで正直で頑固だし、たとえ刑務所行きにならんくても自分で自分を罰しようとするのだろう。

・・・自殺だけは選ぶんじゃないぞ、柏木鈴音。

思い浮かべるのは、最期に見た奴の顔。
呆然として、泣きそうだった。

だが、アイツは逃げたりするような弱い奴じゃ、ねー。だから、きつと大丈夫だろう。

自暴自棄にならなきゃいいがな。

そこまで考えて、俺は思考を放棄した。

いくら精神年齢が高校生の俺とはいえ、幼児になっちゃったのだ。体の欲求に勝てるはずもない。いやそもそも、元の俺にも勝てない欲求はたくさんありましたけどね。

混濁していく意識に身を任せ、俺は眠りについた。

と、思ったのだが。

俺は今思いつきり目覚めている。うん、特に眠いという耐え難い欲求も襲ってこない。

どういうことだ？

果てがどこなのか分からない、上下左右の感覚を忘れてしまいそうな黒一色の空間で立ち尽くす。
そして、ふと違和感に気づく。

からだか、無い。

自身の視界に入ってくるはずの体が無い。いや、そもそも今の俺に視界なんてものが存在するのかわかっているのか？

体が霧のように小さな粒子となって、無数に散らばり空中に浮かんでいるような錯覚。

一体どういふことだ？訳が、わからない。

様々な疑問が、無い頭に渦巻く。

ここはどこだ。どうして体がわからない。なぜ俺は。いやそもそも俺は。どういふことだ。わからない。眠くない。俺はここにいる？わからない。わからない。わからない。わからない。

これは、夢か？

そう、呟いたそのとき。

向こう側に鏡のようなモノを幻視した。

それに誘われるように、存在しないはずの体を動かす。

奇妙な感覚だ。

今の俺には、目もなく耳もなく鼻もなく口もなく手もなく足もなく、体というものが無いはずなのに、意識しなければ普段通りに活動できる。

けれど一度意識してしまえば、俺はただの霧。漂うだけになってしまふ。

妙な気分になりながらも、鏡の前まで移動する。

鏡の中を覗き込むと、そこには幼児がぺたりと座り込んでいた。

ぷっくりとした頬が可愛らしく、生えかけの金属質な赤い髪に濃い青にも見える紫色の瞳はどこか見覚えがある色だ。

それを目撃した瞬間、漂う霧であったはずの俺に、凄まじい重力が押し掛かった。

気がつけば、鏡の前に座り込んでいる。

辛い。

体があるというのは、こんなにも辛いことだったのかと実感する。先程の霧のような状態と比べれば、コレは雁字搦めにされているに等しい。体によって、自由を阻害されている感覚。

ゆっくりと手を持ち上げると、そこにはぶっくりとした手があった。鏡の中で、幼児が同じように動く。

コレが、俺か。

そのままじっと、可愛らしい赤ん坊を覗き込んでいると、ふと鏡が光った。

眩しさに一瞬目を閉じ、光がある程度おさまったところで恐る恐る目を開く。

すると、鏡に浮かぶ、見たことのあるソレ。

ソレは、俺がよくやるゲームのキャラクターメイク画面そっくりだった。

第二話 厨二は程ほどに！（後書き）

俺はちゅーにびょーです。

キャラの設定とか二つ名とか考えるの超絶好きです。お風呂ではそればっか考えてる。

そしてそればっかで小説が進まない（笑）

ええと。このままだとリンネちゃんが酷い子になってしまうので一応説明。

『俺の中では』リンネちゃんは冗談でヤマイの背中をとんっ！だがヤマイは考え事に没頭していて無防備だったので、予想外に体勢を崩す。

それを助けようと咄嗟に手を差し伸べようとするリンネちゃんだったが、ヤマイはリンネを車道の外に飛ばす。そしてそのままブラックアウト。

この件は事故として処理される、と信じたい！

まあ、俺の中では、なので。

もしかしたら本当にリンネちゃんは転生したくて今回のことをしでかしたのかもしれないのである。

第三話 自棄と書いてポジティブと読む（前書き）

タイトル通り。

むしとタイトル＝俺です。

突っ込みどころ満載だが、指摘するなら優しくしてくれとありがたい。

・・・別のも書こうかなあ。

第三話 自棄と書いてポジティブと読む

目の前に浮かぶキャラクターメイク画面。

・・・これは、アレだろうか。

よくアイツが言っていた、転生に伴い授けられる特殊能力とかいう奴なのだろうか？

おそらくきつとたぶん。そういうことなのだろう。

でも、コレのどこが特殊能力という奴なのだろうか。もしかすると、ええと、つまりコレで今度の自分を作成しろ、ということなのか？
そういうことでよろしいのですかね？

「きゃむちま」

ぬ？神様、と呟いたつもりだったが、どうやら高校生の精神を以ってしても、赤ちゃんの舌足らずさは直らないらしい。

何だコレ、何の羞恥プレイだ！

誰にも見られていないというのに、俺が自分で見ているというだけなのにこの恥ずかしさ！！

人が見ている場所では一体どれほどの辱めを受けることになるのだろうか。恐ろしい、恐ろしすぎる。

背筋に電流がはしるのを感じながら、ごくりと唾液を飲み込む。

それにしても、と頭の中の恐ろしい思考を一旦リセットして、目の前の鏡を見る。

そこに浮かび上がっているのは、座り込んだ俺と俺のステータス。

名前 / ヤマイ・アガメディア

性別 / 女

種族 / 人間

職業 / 未定

お！種族と出るあたり、もしかして動物になったりする選択肢もあつたりしたのだろうか。畜生道？アレか、前世の行いによって人間だったり動物だったりするのか。

……ん、待てよ？

何か今見てはいけないものを見てしまった気がする。目を少しの間瞬かせる。

名前／ヤマイ・アガメディア

性別／女

しゅぞ

ん？……アレ、目にゴミが入っちゃったかな？

落ちて着こう一旦落ちて着こう俺。

目は、正常か？目をごしごしと擦ろうとしたのだが、恐ろしいことに手が目まで届かない。な、なんて不便なんだこの赤ちゃんボディ。そつえば赤ちゃんて体のバランスがいまいちだった気がする。頭が大きくて体が小さい、のか？最後にもう一度だけ、確認する。

名前／ヤマイ・アガメディア

性別／女

……

無言で太もをすり合わせる。あるはずだ、そこにきつとあるはずだ。このボディでは極小なサイズとはいえ、見逃しようのないものが。ふにふにとするものが、あるはずだ。

……

「ぬお」

死のう。無理だ。俺にこの状態で生きていないなど、俺は一体何をしたというんだ神よ！！

いや、確かに神死ねとか思ったことも多少なりともありますけどね、いやだからといってこんな仕打ちはないんじゃないのかな神様。

そうだ！こういう場合は神様が目の前に現れるはずだとアイツが言っていたはず。アレだ、きつと恥ずかしがり屋の神様なんですよね！
「でれこえきやむちま（出て来い神様）」

さあ、さつさと俺を元の男の子に戻したまえ。あ、いややっぱ元よりももちつと美形にしてくれるとありがたい。

……？アレ、出てこない。

「きやむちやー！」

………

反応がない。どうやら神様はいないらしい。

ふあつく！！

死ね。神死ね。アイツと同じくらい死ね。一度でなく俺の平穩のために二度死ね。

「なー」

あーあ。俺はこれからおなごとして生きていくことになるのか。女子として生まれ女子として人生を謳歌し男に迫られ男とイチャイチャし男と結婚し男との間に子をなし、男とともに死ぬ破目になるのか。

ああ、まるで生き地獄。

もしかしてコレはあいつの罠ではなからうか？

俺と男をイチャイチャさせたいがために、俺を暗殺し女子として生まれ変わらせた、なんて。

いや、さすがにアイツにそんなことは、できな、い。はずだ。

アレなんでだろ、自信を持って言えないだなんて……。

仕方ない、とにかく今は自分をメイキングするしか……で、そうじゃん！

俺自分をメイキングできるんじゃない、てことは男子とか女子も選べるし、顔だつて美形にし放題のはずじゃあないか！

「うおー」

おお、さっそくテンション上がってまいりましたよ俺。

よし、じゃあさっそく俺製作を始めるとしますか！

絶望した、俺はこの世に絶望した。

そもそもこんな世界にどうして生きる価値があるというのだろう。

もうこのまま、いつそ死んでしまった方が俺自身平和なのではないか、と思ってしまう。

何故だ、何故神は俺を生んだのだ、女子の、しかも顔やスタイルを弄ることのできない身で。

いや、それは至って普通のことなのだろうけど。

キャラクターメイクできるんだからてっきり容姿も思うがままと、

一瞬でも勘違いしてしまった俺のバカヤロークソツタレ！！

コレか、神様はコレが見たかったのか。

絶望の淵に追いやられたいたいけな少年（元）が一筋の希望の道に縋り付こうとしたら、実はそれが蜃気楼で少年（現女子）が絶望の底へと落ちていく姿を！

哀れすぎるこの俺を今どこかで嘲笑しているというのかこのクソツタレファッキンゴッドめが！！！！

「ちね」

死ぬ。俺とともに死ぬ。世界の果てで共に息絶えようじゃないかそ

うすれば世界はきつと平和になるだろう俺バンザイ俺を讃えよ。

ハッ、落ち着け俺。また何か、宙に猫が取り憑いてしまっていた。恐るべし、厨二。

おっと、いかんいかんこんなネガティブ思考。

俺の研究によると、ネガティブ思考こそが厨二病を呼び込んでしま
う鍵なのである。ネガティブエネルギーが厨二病に繋がる禁断の扉
を解き放ち、厨二病がネガティブエネルギーを生産する。
まさしく負の連鎖。

ここはポジティブシンキングによって乗り越えるところだ。

「ほりれるぼりてる（ポジティブポジティブ）」

・・・そうではないか！

たとえ女子に生まれたからとはいえ、男と必ず結ばれる必要はない
！独身で一生を過ごすことも可能であるし、世の中には女子が好き
な女子というものも存在する。

生まれ変わるまで大嫌いだっただけ、同性愛も悪くはないですね今
ならお前が理解できる気がするよ柏木鈴音。

同性愛バンザイ！

それに女子の体を持つということは、女の子の体を見放題というわ
けでもありますな、ふひっ！

ん、何か自分がやましい人間のような気がしてきて恥ずかしいな。
いやまあ、コレは男なら誰しも持つ性という奴ですからな。しかも
俺健全な男子高校生だし。それだけでも免罪符になるだろう。

よし、絶望の希望に変わったところで、さっそくキャラクターメイ
クを始めるとしよう。

先程調べた結果、どうやら俺ができることはある程度限られている

らしく。

容姿や名前、性別種族などは変えられない。

まあ、これはよく考えたら当然のことである。生まれ変わり目が覚めた時、目の前にいたあの二人は、俺の容姿を見る限り、というかそんなこと考えなくても俺の両親だろう。

と、すればこの三つの要素はもう既に変えられない事象として彼らが認識してしまっているだろうし、それらを改変することはおそらくできないのだろう。

まあ、コレには納得するしかない。

それにしても前世と名前が一緒だなんて不思議だ。しかも苗字、というかファミリネームまで前と似ているところがある。

何か関係でもあるのだろうか？いや、今それを考えても俺の役には立たないだろうし放っておこう。

そしてできること。

キャラクターメイク画面をちょこちょこ弄った結果、できることは二つ。

少ないと言っなけれ。いや確かに俺もそう思ったけど……。

一つ目、それは職業の選択。

どうやら、まるっきりロールプレイングゲーム的要素があるらしく、有難いことに様々な職業が選択肢として上がっていた。

戦士に剣士、盗賊や魔術師などメジャーなものから、占星術師や人形師、果ては道化師などマイナーすぎるものまで。

生活に直接関わる、鍛冶師などが無いのが不思議というか、残念と
いうか。

て、何っ！？

魔術師という職業があるということは、世界には魔術というものが本当に存在していたのか？！あ、いや。それとも俺はアイツが言っていたように異世界に転生してしまったのか？！

……あのとき見た両親の髪や目の色って、漫画ではありそうでも現実では見たことがない、気がする。
といても、俺生まれてこの方、外国に旅行に行ったこともないですけどね！

うーん、となると、魔物とかがいると予想した方がいいのか？

だったら魔術を使いたいという気持ちより、生き残るために強靭な肉体を求めた方がいいのだろうか？

誰か仲間になってくれるならいいが、仲間が作れず自分一人の状態
で戦うとなると、魔術師系は辛いんじゃないだろうか？

「あー」

いやしかし、戦士や剣士となると自分の手の届く距離まで近づかなければいけないわけで……。だったら魔術師系統の方が安全かもしれない。

直接戦闘に関与するというよりは、後方支援のような形でした方が・

……。あいや、でもなあ。

「うー」

悩む。もの凄く悩むぞ、コレは。

これ時間制限ありで、時間が経ちすぎると勝手に決まったりしないよな、と画面を弄くり考えていると、見たこともない職業が目についた。

『呪禍士』

うむ、何か凄く悪役っぽい。

アレだろうか、呪いとかで相手を弱体化させる職業だろうか？
だったら補佐だろうし、役には立たんか。と思いながら、とりあえず職業説明の欄を見てみる。

呪禍士

あらゆる災厄や不幸を対象に叩き込む魔術師派生の亜種。呪術系。状態異常系の術や、トラップとして使用する設置型、果ては強大な災厄を引き起こす広範囲殲滅など、幅広く特殊な術を扱う。

しかし、その特異さからこの職の適性がある人間が少なく、また特性から忌み嫌われることも多い。特に幼少期は適性を上手く制御することができず、小規模ながらも不幸や災厄を招いてしまうこともあるため、追放されたり殺されることも多い。

ただこの術をきちんと扱うことができるのならば、それは味方にとって強大な戦力になることは間違いない』

ふむ。・・・なんか、思ったよりも強力そうな職業だな。

なかなか魅力的だ、物騒な部分を除けばだが。

適性を上手く制御することができず、不幸や災厄を招いて殺される。

うええええええ。何それ怖い。

あれか、何事にも表と裏があるっつーことなのか！強力だけどその反面殺されちゃう不安も多々ありますよーってことか？！

うーむ。いやだがしかし、それを差し引いても魅力的だ。

相手を弱体化させることもできるし、トラップを設置できるし、強力な術を使うことができる。何より、その悪役っぽい名前がいいですね。

呪い系かー、イメージとしてはねっとりじとじと。

どっちかってーと殴ってさっぱり、な感じの俺には似合わないような気がするが。むしろ学校にいた地味な女子にこそ似合う気がする。・・・いややっぱ駄目だ。アイツらにこんな能力を持たせたら、ばーいずでらぶらぶな呪いをかけられてしまいそうだ。

男相手にしか××しないような呪いとか。お、恐ろしすぎる。

うーむ、悩むな。

だが、思わず胸がときめいてしまい何か、この職業にはある気がする。

何よりこれでアイツに地味な復讐ができるのではないか、という期待に溢れている。

箆笥の角に小指をぶつける呪いとか。

はたまた机の上の者が小指目掛けて落ちてくる呪いとか。

ふひ、ふひへへへ。

いいかもしれないぞ、俺。

この職業はきつと世界を超越して奴に復讐する力を与えてくれるだろう。ただの勘だが、そんな気がしてやまない。

うーむ、よし。君に決めたぜ！！

「ちようわーぽちーたな（というわけで、ポチツとな）」

そして二つ目。この体の基礎スペック。

『呪禍士』を選択した今、俺の体は魔術師系統に適性を持つように改造されている。つまり、物理に関する能力が失われ、代わりに魔術に関する能力が上昇したのだ。

また、『呪禍士』の特性により、幸運値は表示なし。つまり、今後いかなる手段をもってしても、幸運は上昇しない、らしい。

といっても不幸なわけでもないらしいのが、少し変なところだ。

災厄を操れるということは、自身に降りかかる不幸も操作して免れることができるから、ということなのか？

まあそんなことは今はどうだっていい。

そしてこれからが悩みどころである。

俺の現在のレベルは1。次のレベルまでに必要な経験値は10。どうやらこんなところまでゲームと同じらしい。

レベルが上がること、もちろんステータスも上昇するのだが、そのステータス欄の成長度合いを俺自身が選択することができるのだ。

割り振った数字が0のところは通常通り、成長する。

割り振った数字が1のところは通常より、2倍成長する。

割り振った数字が2のところは通常より、4倍成長する。

といった具合だ。

割り振れる数字は10。ステータス欄は幸運を除いて物理攻撃力・物理防御力・技力・体力・魔術攻撃力・魔術防御力・知力・魔力・俊敏性・技術力の十個。

攻撃力・防御力はそのま物理や魔術に対する攻撃や防御。

技力・知力は技や術に対する理解力。これの数値が低いと使えない技・術があるらしい。

体力・魔力はこれは技・術の使用回数に関わる。

俊敏性はそのまま素早さや身軽さ。

技術力は道具使用の上手さ。

不思議なのは、体力≠生命力ではなく、技の使用回数の関係であったことだが、よく考えると確かにそうだ。

体力がなくなっただからって死ぬわけじゃないし、そもそも生命力を鍛えるのはなかなか大変だ。

どんなに頑丈な人間だって首を切られれば死ぬだろうし、逆に同じ所を刺されようと、鍛えてるうんぬんではなく、運次第で生死が決まる。

さて、どうしようか。

少し考えて、結局魔術関係に全て振ることにした。知力と魔力に3、魔術攻撃力と魔術防御力に2ずつ。

この際それ以外は捨てちゃっていいだろう。考えるの面倒だし。

『完了』

をポチッと押す。

何か眠いしもうどうでもいいかなあ、と小さく欠伸をして、ぼんやりとしていた思考を瞼とともに閉ざした。

第三話 自棄と書いてポジティブと読む（後書き）

最初は割り振りで2にしたなら2乗にするつもりだったんだが、よく考えたらそれだとありえんくらいの数値になっちゃいそうな予感があったのでやめてみた。

ら、そもそもレベルが上がることに通常ならどのくらいステータス上昇すんだろ、と行ってしまった。

うーむ、難しい。

まあそこらへんは適当に流してくれば、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5877t/>

代替転生物語

2011年9月15日13時20分発行